

卒業生の語りから得られた教育の成果と課題

——就職後6カ月目の卒業生へのインタビュー結果——

大納 庸子¹・竹元 恵子¹

新垣 洋美²・近田 敬子¹

¹ 園田学園女子大学 人間健康学部人間看護学科

² 京都府立医科大学 大学院保健看護研究科

I. はじめに

看護職を目指す女子学生は、他の学問分野の学生に比べ、入学時点ですでに就業意識が高いことは、さまざまな研究から明らかである（若林ら, 1983; 白鳥, 2002）。一方で、新規採用の看護職の離職率の高さが課題となり、その要因の検討や予防策に向けた取り組みがなされている。新規採用の看護職の離職の要因としては、就学時から学生時代に描いた看護専門職者としてのイメージと現実とのギャップに、折り合いをつけることができないことが推察される。これらより、看護学生を教育する機関においても、学生が看護専門職者としての経験を積み重ね、人々の健康課題に貢献し続けることができるためのキャリアデザインを、在学中から学生自身が描くことができるための支援に取り組む必要性が高まっている（山内ら, 2008）。

本学科では、ヒューマンケアの実現ができる看護専門職者を育成するために、「向き合う力」「実践する力」「連携する力」をカリキュラムの軸とし、4年間の教育が段階的に行われている。「向き合う力」は学生生活全般を通じて生まれ、「実践する力」と「連携する力」は、主に臨地での看護実践の体験を通して生まれていく。これら3つの力は、卒業生1人1人が就職先でも活用、発展させながら看護職としてのキャリアを積み重ねることを願って構築された。

学士課程における看護基礎教育では、保健師助産師看護師指定規則によるカリキュラム内容と共に、高等教育機関としての固有の目的・目標・方法を整備しており、そこでどのような人材・能力が育成されているのか、その教育成果や課題の検討の公表が求められるようになってきた（吉本ら, 2008）。

そこで、第1期生を輩出したことを機に、卒業生がこの3つの力をどのように獲得し活用、発展できているのかを、学生時代から現在までの体験を踏まえ語ってもらうことを通し、本学科の教育の成果を振り返ることにした。

なお、本稿は、卒業後6ヶ月が経過した時点でのインタビュー結果に基づいた報告である。

Ⅱ. 研究目的

第1期生の卒業生が、母校の教育をどのように受け止め、現在の職務状況にどのような影響をおよぼしていると考えているかの実態を把握し、教育の成果と課題を見出す。

Ⅲ. 研究方法

1. 対象

平成22年3月にA大学を卒業し、看護師として実習病院へ就職した卒業生24名に研究協力の依頼をし、3名から返事がきた。さらに継続研究への協力も可能であったこの3名を、今回の研究協力者とした。

2. データ収集期間

平成22年9～10月

3. データ収集方法

インタビューガイドによる半構成的面接を、研究協力者のプライバシーが保持される大学内の個室で、卒業生と面識のない学科教員が面接者となり、約60～90分間にわたり行った。

面接内容は、「向き合う力」「実践する力」「連携する力」を意識した時やその内容、大学入学時の看護師イメージと現在の自分の姿とのギャップについて、学生時代に身につけたと自信のある事柄、学生時代に頑張っていたと感じた事柄などであった。

面接内容は、同意を得てICレコーダーに録音し、卒業生と面識のない者が逐語録を作成し、研究データとした。

4. 分析方法

逐語録から、教育の成果を表している協力者の思いや考えを、一つの意味をなす文節で抽出、コード化し、類似性に従ってカテゴリー化した。次に、それらの内容がどのように関連しているか、研究者の見解が一致するまで検討した。

分析は質的分析に精通している共同研究者と行い、結果の信頼性と妥当性の確保に努めた。

5. 倫理的配慮

A大学生命倫理委員会の承認を得た。研究協力者には、研究目的、方法、プライバシーの保護、研究参加および途中中断の自由、職場での勤務評価とは一切関係ないことの保証、インタビューデータの録音と保管、研究成果を看護系学会や雑誌等で発表すること等を、研究依頼用紙に

明記し、文書と口頭で説明し同意書に署名を得た。

IV. 結 果

協力者3名の語りは、143の文節から133コードが抽出され、99のサブカテゴリー、27のカテゴリーに整理できた。27のカテゴリーは、【認識の継続】【現実とのギャップ】【自分の考える看護ができないジレンマ】【前向きな私】【強みの実感】【A大学の学生であること】の6つの領域に分類できた。語りから得られた教育成果は、図に示した。

1. 【認識の継続】について

3名の語りから、本学科の教育理念の一つである「向き合う力」について、学生時代から卒業後6ヵ月までに、「向き合う力」の育成《「向き合う力」の習得》《「向き合う力」の再生》というプロセスがあることが明らかになった（表1）。

1) 《「向き合う力」の育成》

Cさんは、「私が逃げたら、その人たちを裏切ることになってしまう」「嫌なことも逃げずに行動できるようになった」と就職後の自分を語り、〈逃げない決意〉を抱いていた。またAさんは、「どんな患者さんでもいろんな思いを抱えているから逃げないようにしよう」と学生時代に教員に指導された思いをもち続けることで、〈患者と向き合う〉ことができていた。そしてCさんは、「病院にいる間は歯を食いしばってでも我慢しなさいと言われた。」と語り、Aさんは

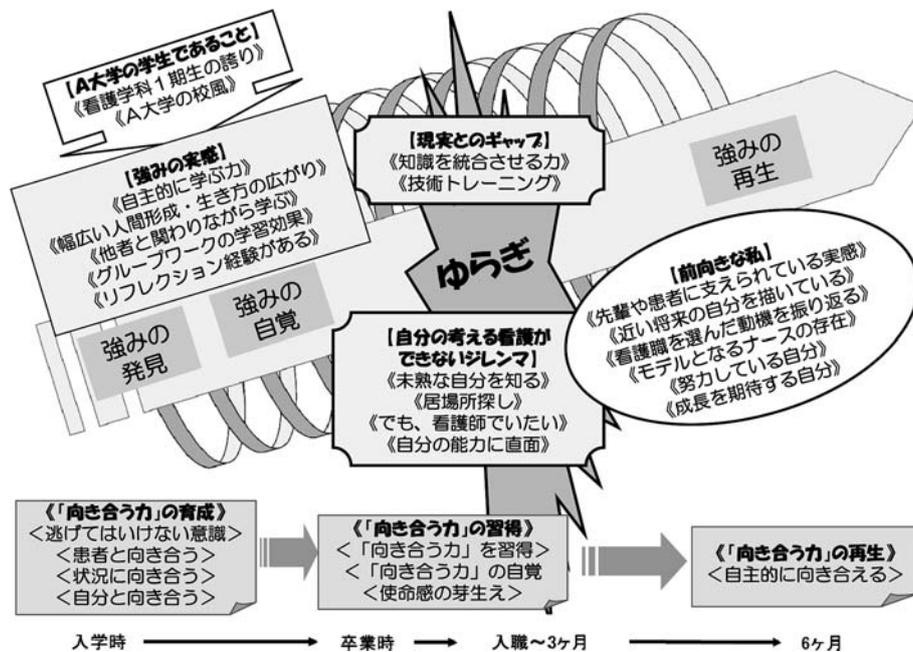


図 語りから得られた教育成果（卒業後6ヵ月）

表1 【認識の継続】

《カテゴリー》	〈サブカテゴリー〉	[コード]
「向き合う力」の育成	逃げてはいけない意識	嫌なことを自覚しても逃げない
		逃げないことは相手との始まり、続くということ
		逃げることは相手を裏切ること
	患者と向き合う	患者のそばにとどまる
		患者から逃げない決意
	状況に向き合う	病院では自分の感情を出さないようにする 向き合う意識が逃げることを止めた
「向き合う力」の習得	「向き合う力」を習得	患者のそばに行くこと（＝患者と向き合うこと）
		いつの間にか逃げないようになる
	「向き合う力」の自覚	徐々に知識を体験を通して身につけていく
	使命感の芽生え	「向き合う力」の自覚
「向き合う力」の再生	自主的に向き合える	逃げないために自分ができていることをする
		逃げないことが身につく

「逃げられない状況ではあるけど、逃げたいとかあったけど、でも逃げなかった。」と語ることで、〈状況と向き合う〉ことをし続けていた。協力者たちは、様々な学習体験や看護ケアの提供のなかで、向き合うという経験を、状況だけではなく、自己と向き合うことでつかみとり、《「向き合う力」の育成》ができていた。

2) 《「向き合う力」の習得》

Cさんは学生時代に、「行きたくないと思っても、行かないという選択肢はないと教えられ」、またBさんは、「向き合う力は要所要所にあったが、ケアリングの授業で少しずつ身についた」ことで、Aさんは「患者さんからは逃げないようにしている」と、学生時代から就職後の現在にまで継続して、〈「向き合う力」を習得〉できていた。そしてBさんは、「(自分にあるのは)向き合う力だと思います。」と言い切り、〈「向き合う力」の自覚〉が見られていた。さらにCさんは、「できないことが多くても、私なりにできることをする。」と、今の状況や自身のもつ力で患者のためにできることをするという〈使命感の芽生え〉を抱いていた。協力者の語りから、卒業生は卒業前後から自分自身の経験を通して、《「向き合う力」の習得》がなされていた。

3) 《「向き合う力」の再生》

Cさんは、「患者さんから逃げないことは身についた。」と語り、逃げないことが身についたことで、自身の目の前にある人や状況がどのようなものであるかを捉えたうえで、〈自主的に向き合える〉ことができていた。これは、就職後に現実に直面し、自分を見失いそうになるなかで、学生時代に育成され、習得できた《「向き合う力」の再生》に、自ら立ち向かった結果といえる。

このように卒業生は、学生時代から卒業後に「向き合う力」を認識するだけでなく、その認識を継続してもつことができていた。

2. 【現実とのギャップ】について

3名の語りから、学生時代に頑張っていればと感じるものに、《知識を統合させる力》《技術ト

表2 【現実とのギャップ】

《カテゴリー》	〈サブカテゴリー〉	[コード]
知識を統合させる力	具体的な教科目の内容	解剖生理学（指定規則に合わせる）からだの構造・機能
	使える知識・根拠の明確化	根拠を意識した勉強 学生時代は、根拠を問われても必要性がわからず、自分で考えることをしなかった
	情報と知識を統合して患者を理解する学習の必要性	就職をして、情報は関連しているので、つながり（根拠）を意識して勉強する必要性が理解できた
	暗記ではなく、知識と知識を統合する学習方法の必要性	学生時代の勉強法（国家試験対策）では、臨床では対応できないことがわかった
	勉強の必要性	勉強の必要性
	勉強の深さの必要性	学生時代の勉強は浅い
技術トレーニング	臨床で通用する生活援助技術の習得	（就職すると）生活的なケアは、基本は習得できているとみなされる
	卒業直前のトレーニング	（特定できない）看護技術
	コミュニケーション技術の必要性	さまざまなコミュニケーションの体験？

トレーニング》があり、これらは就職して現場に身を置くことで、【現実とのギャップ】を実感したためといえる（表2）。

1) 《知識を統合させる力》

Aさんは、「(学生時代は) 実習中に、先生に根拠を聞かれたけど、答えを言われたらそれでOKと考えていた。」と語り、学生時代は根拠の重要性がわからず、実践に関連づけて深めることが不十分なままとなり、〈使える知識・根拠の明確化〉が卒業後の課題になっていた。また、Bさんは「(卒業後の勉強は) これも考えられるし、この情報もとつとかなあかんし、それが就職しないとわからなかった。」と語り、卒業後に、情報は関連しているので、繋がりを意識して勉強する必要性が理解され、〈情報と知識を統合して患者を理解する学習の必要性〉に気づくことができていた。すなわち、卒業後は《知識を統合させる力》の重要性を実感したために、学生時代に頑張っておけばと感じていた。

2) 《技術トレーニング》

Cさんは、「(就職すると) 診療的な技術は入ってから身につけるといって感じで、生活的なケアのことは特殊なこと以外は、できるものとして扱われるんですよね。生活的なケア、基本的な技術を復習して卒業したほうがよかった。」と話し、〈臨床で通用する生活援助技術の習得〉や〈卒業直前のトレーニング〉を、就職までにできていればと、《技術トレーニング》を希望していた。

3. 【自分の考える看護ができないジレンマ】について

3名の語りから、看護師として看護ケアを提供するなかで、《未熟な自分を知る》《居場所探し》《でも、看護師でいたい》《自分の能力に直面》という、切実な思いを抱いていることがわかった（表3）。

表3 【自分の考える看護ができないジレンマ】

《カテゴリー》	〈サブカテゴリー〉	[コード]
未熟な 自分を知る	受身的な自分	責任の重い実習という感じ
	未熟で現状に向き合えない自分	先輩の技術に圧倒されてしまう（自分の方法で看護が提供できていない）
	漠然とした自信が通用しない現実を知る	ある程度できると思って卒業したが、現実とのギャップに戸惑う
	自分の現実を知って立ち留まる	就職してできない自分に落ち込む
	未熟な自分を知る	技術も知識も未熟
	無力感に苛まされる自分	夜勤が入り、受け持ち患者の人数が多くなると、時間の調整ができなかった
居場所探し	逃げ出したい自分	帰りたくなり、泣きそうな時期
	居場所を探す	何をすればよいのかわからず、ここにいてもいいのかと思っていた
でも、看護師でいたい	看護師をやめたいと思わない	出来ない自分に不安だけど目指すことをやめたいとは思わない
自分の 能力に直面	患者との関係づくりのつまずき	自分から話さない患者とは、深く話せずに困ることが多い (先輩のように) 患者との信頼関係が築けない
	無力さがつらい	(患者さんに対して) どうすることもできないときにつらく感じる
	患者、家族に向き合えていない自分	業務や勉強が優先になり、患者さんと接する時間がなくなり、向きあえていないと思う
	患者、家族と関わっていない現実	その日限りの関わりになるので、患者と深いかわりができない
		患者、家族と関わっていない
		そばに寄りそうことができていない
		業務に必死で、(患者の) 精神面まで関われない 患者一人一人を細かく見れていない
	できていない自分を自覚する	毎日、勉強（予習までできない）
		(学生と同じように) 違う色の白衣を着せてほしい
		毎日、落ち込んで、傷ついて、打たれ弱い自分 自分のことに追われて、それで終了する日も多い
仕事から離れられない自分	(毎日の生活で) 頭や心の片隅で仕事のことを考えてしまう	
解決できない自分に混乱する	(自分の前で起こっていることに) 向き合い、逃げないようにしたいが、どうすればよいかわからなくて、自分で混乱する。	
空回りして終わることもある	向き合う意識が逃げることを止めた	

1) 《未熟な自分を知る》

Bさんは、「自分のできるかなっていう気持ちで、先輩の看護技術に流されてしまって…」と、先輩の技術に圧倒されてしまう、〈未熟で現状に向き合えない自分〉を自覚することになった。またAさんは、「(就職当初は) こんなにできなかったんだ、私…。」という、ある程度できると思って卒業するが現実とのギャップに戸惑い、〈漠然とした自信が通用しない現実を自覚〉し、〈自分の現実を知って立ち止まる〉ことによって、《未熟な自分を知る》ことにつながっていた。

2) 《居場所探し》

Cさんは、「(卒業後3ヶ月ごろに) 廊下において、帰りたいと思う時期があって、泣きそうだった。

た。」と、〈逃げ出したい自分〉を自覚し、さらに A さんは、「(夜勤に入って、急変があって) 何をしたらいいのかわからないって感じて、ここにいていいのかなと思っていた。」と語り、看護師としての自分の《居場所探し》をしていた。

3) 《でも、看護師でいたい》

C さんは、「(看護師を) 自分に向いてないなと思ったことはありますが、目指すのをやめたいと思ったことはない。」と言い切り、できない自分に不安がありながらも、〈看護師をやめたいと思わない〉という強い意思のもと、《でも、看護師でいたい》と自分にいいきかせていた。

4) 《自分の能力に直面》

C さんは、「先輩のように患者との信頼関係が築けていない」と振り返って、〈患者との関係づくりのつまずき〉を自覚していた。C さんはまた、「業務に追われていて、精神面まで関わることができていない」「患者一人ひとりを細かく見れていない」などと話し、業務に必死で、こんなことならできるのではないかと思いついたとおりに看護ができていないこと、〈患者、家族と関わっていない現実〉を受け止めていた。このように、できていない自分と対峙して、《自分の能力に直面》していた。

4. 【前向きな私】について

3名の語りから、自分自身を冷静にみつめ肯定的に捉える《成長を期待する自分》《努力している自分》や、自分の周囲にいる人々と関わることで、《先輩や患者に支えられている実感》《近い将来の自分を描いている》《看護職を選んだ動機を振り返る》《モデルとなるナースの存在》を実感する、【前向きな私】が明らかになった(表4)。

1) 《成長を期待する自分》

C さんは、「先輩は少ない時間の中で患者さんの話を聞こうとしているので、経験の中でそれができるようになってくるのかなと思っています。」と語り、経験を積むと先輩のようにになれるかもしれない自分を発見して、〈先輩のようになりたい〉と期待を抱いていた。また、〈なりたいた自分への期待〉〈成長を自覚する〉のように、《成長を期待する自分》として自分自身を認めていた。

2) 《先輩や患者に支えられている実感》

B さんは、「受持ち患者さんが亡くなったとき、いろんな人が心配していると教えられ、声もかけてもらって、支えられていると思いました。」と語り、チームスタッフから声をかけられ、支えられていると自覚できることで、〈チームの一員という自覚〉を抱いていた。また C さんは、「ミスした時に、患者さんから『私も頑張るから、あんたも頑張り』と言われ、この人(患者)と関わってよかった。先輩から言われるよりも、患者さんから言われると一発で理解できる。患者さんに育ててもらっている。」と語り、患者さんからの励ましのことばから〈患者に育てられている実感〉を抱いていた。また協力者は、直接〈先輩のフォローに助けられる〉という体験や、〈チームの雰囲気や安心〉して日々のケアに臨んでいると話していることなどから、卒

表4 【前向きな私】

《カテゴリー》	〈サブカテゴリー〉	[コード]
成長を期待する自分	なりたい自分への期待	自分も患者との信頼関係を築いていけるようになりたい
	先輩のようになりたい	経験を積むと、先輩のように患者さんの話がきけるようになるだろうかと期待する
	成長を自覚する	最初にわからなかったことも、確実に自分のものにして、対応の仕方もある
	成長していく自分	今の実践が、次のステップにつながる
努力している自分	チームの一員という自覚	(病棟へ) ちょっとでも力になりたい
	努力している自分	(情報を) 少しずつ関連づけて、報告できるようになった 申し送り内容を、考えながら聞いている
	先輩に質問する	わからないことは先輩に質問し、自分で勉強して、モチベーションを保つようにしている
	振り返りを大切にする	患者を振り返り、ノートに書き留める
	患者を理解したい欲求	申し送りの内容を一生懸命に聞いて、患者のことを理解するようにしている
	自分でできることをみつける	申し送りを聞いて自分でできることをみつける
	責任をやる気にかえる	(現状から) 逃げるのができないことで、仕事が頑張れる
	自分の課題を自覚する	(カンファレンス内容を) 理解できない時があり、発言はしたいけどできない
	わかりたい欲求	チームで話し合われている内容を理解するようにしている
	できていることを自覚する	自分で考えて動けることがある
	頑張っている自分	経験をプラスに受け止められると頑張れる
先輩や患者に支えられている実感	チームに見守られている	先輩たちが優しく、自分は落ち込むことがない
	チームの雰囲気に安心	スタッフとのコミュニケーションはとれており、いい関係が築けている
	病院の環境に恵まれている	教えてもらえるという環境に恵まれていると思う
	チームの一員という自覚	チームスタッフから、たくさん声をかけてもらい、支えられていると思いい、頑張れる
	先輩のフォローに助けられる	自分のフォローを先輩がしてくれると実感している
	患者から支えられている実感	(今後) 患者を受け持ったら逃げるのができないので、今までの患者さんから学んだことを、その患者さんへ返したいと思う
	チームの一員という自覚	チームの一員である自覚が芽生えている
	患者に育てられている実感	(ミスしたときに) 患者さんから励ましの言葉をもらい、患者さんに育ててもらっていると実感している
近い将来の自分を描いている	ありたい自分が見えている(=自分を客観視できている)	ありたい自分からまだ遠いが、まだ仕方ないかと思う
	なりたい自分はあるがまだできない現実	(他職種、他メンバーと) 連携できるようになりたいが、今はまだできていない
	自分への期待と不安	半年後の自分の姿は努力しだいであるが、期待と不安を抱いている
看護職を選んだ動機を振り返る	家族の影響	家系(親戚)に医療職で働いている人が多かった
	女性として自立できる仕事	女性として自立して、一人で稼げる(生活できる)と思った
	人と関わる仕事	人と関わるのが好き
	ナースとして人と関わる	高校時代の病院体験で、人間相手でも看護師に興味(関心)をもった
モデルとなるナースの存在	憧れのナースの姿	論理的に考えてケアしている先輩を見ると、知識とか技術をみにつけていきたいと思う 忙しいなかでも笑顔で患者と関わっている看護師が、きらきらしてすごいと感じた
	先輩のようになりたい	オン、オフが切り換えられる先輩のようになりたい チームの看護師には、それぞれいいところがあるので、みんな素敵に患者と関わっている
	ナースとしてのモデルの存在がある	患者の立場になって考えて、丁寧に仕事ができるチームリーダーがモデルである
	憧れと自分のギャップがある	学生時代は素敵な看護師さんとしてあこがれるが、自分がそのようになるにはイメージできなかった

業生は《先輩や患者に支えられている実感》を抱いて、成長していた。

3) 《モデルとなるナースの存在》

Bさんは、「先輩が情報をアセスメントして、論理的に考えているのを見たら、あんなふうになりたいと思う。」「ナースがきらきらしていて。知識をもち、忙しいなかでも笑顔できちんと関わっている看護師さんを見て、すごいなと思います。」と語り、自分にはない姿や、自分が思い描く看護師の姿を目にすることで、〈憧れのナースの姿〉を具体的にイメージして、日々の努力を続けていた。さらにBさんは、「チームの看護師はみんな優しく、みんな素敵で、それぞれに患者さんと関わっている」と感じ、〈先輩のようになりたい〉と考えていた。そのなかで、卒業後に自分も看護師になり、〈憧れと自分とのギャップ〉を感じていた。卒業生は、日々の看護ケアで精一杯ななか、《モデルとなるナースの存在》を具体的に自分が看護師として働く姿として、イメージすることで、自分自身を励まし、成長していた。

5. 【強みの実感】について

3名の語りから、4年間の講義・演習・実習体験を通し、《自主的に学ぶ力》《幅広い人間形成・生き方の広がり》《他者と関わりながら学ぶ》《グループワークの学習効果》《リフレクション経験がある》という、【強みの実感】が明らかとなった（表5）。

《リフレクション経験がある》は、Cさんが「初めはなんで、これをやってるんだろうと思ってたけど、実習が絡んでくるようになってからは、自分が思っていたことと、先生がコメントを返してくれたことが違って、その時は起きたことに対する原因の追及が甘かったんですね。今もできていないことが多いと思いますけど、やることが大事なんだろうなって思います。」「院内の卒後3年目の研修でリフレクションがあり、病院でもやるぐらい大事なんだろうなと思った。やっててよかった。」などと語り、〈リフレクションの重要さに気づく〉〈リフレクションを学生で経験している〉ことで、自分が受けもつ患者様へのケア実践を、客観的に振り返る思考を、学生時代に身につけ、卒業後も持ち続けていた。

《リフレクション経験がある》だけでなく、学生時代に培った《自主的に学ぶ力》《グループワークの学習効果》を、卒業後の研修や同期の新人看護師たちとの関わりから実感して、自身の力を【強みの実感】として捉えられていた。

6. 【A大学の学生であること】について

Cさんは、「1期生ということもあったと思う。」「私たちは先輩がいない分、必死にやってきたと思う。」と語り、学生時代から《看護学科1期生の誇り》を抱いていた。またBさんは、「大学の校風がのんびりしていた。」と語り、Cさんも「先生も必死になってくれている。」と《A大学の校風》が自分に合っていたと振り返っていた。これらから、卒業生自身のよりどころとなる【A大学の学生であること】が明らかになった（表6）。

表5 【強みの実感】

《カテゴリー》	〈サブカテゴリー〉	[コード]
自主的に学ぶ力	学習の習慣化	勉強や調べるとい癖 本に戻るとい癖 その日のうちに調べる その日にやるとい習慣
	チャレンジする力	とりあえずやってみる、やらないよりはやってみる できなかったことはもう一度やる
幅広い人間形成・生き方の広がり	複数の資格志向	養護教諭の免許を取得 保健師の免許を取得
	人間関係の広がり	学外での他者との交流の経験
	学問的刺激に対する魅力	看護以外の学びの経験 看護以外の学びで、将来の自分に役立て、自分の幅が広がった
	様々な看護の場と機能の理解の拡大	保健師課程の実習を通して、さまざまな看護の場と機能を理解した 地域看護学実習で、退院後の支援を理解した
他者と関わりながら学ぶ	受け持ち患者に向き合う体験	受け持ち患者が一人だと、真剣に大事に、その人に向き合えた 患者さんと関わる経験から学ぶことは大きい
	看護基礎実習での学び	患者さんの思いや話をたくさん聞けたり、落ち込んだり、いろいろ経験できた(ステップアップ基礎実習では)
	実習という学習のインパクト	実習だからできる習得
	モデルとなる看護師との出会い	実習で素敵やなと思う看護師に出会い、看護師ってすごいなと思えた
グループワークの学習効果	グループワークに抵抗感がなくなった	グループワークは学生時、日常の一部になっていたの で、今は抵抗がない (学生時代) 本当にグループワークが多かった 授業の中で、グループワークが多かった
	さまざまな考えがあることに気づく	いろんな子がいて、こんな考え方の人がいる
	聴くことの大事さがわかる	グループの中で他人の意見を聞かないといけない
	意見をすりあわせることの大切さがわかる	話し合うことで結論を出していく大切さがわかった
	話し合うことで相手を知ることができる	グループワークがあるからいろんなこと話せるから、仲良くなる クラスの名前と顔とどのような子かがわかる
	自分の意見を発言することができる	いろんな人の意見を聞きながら、自分はこう思うとか言える
	集団の中で発言する力が身につく	就職して研修に行って、こんなん言っていないかなと戸惑うことはない グループの中で自分の意見も言わないといけない 実習とかでも発言できなかったけど、発言する力を大学で鍛えられた
リフレクション経験がある	リフレクションの重要性に気づく	リフレクションの思考(原因を分析して追求する)は大事
	リフレクションを学生で経験している	(学生時代に) リフレクションをやっててよかった

表6 【A 大学の学生であること】

《カテゴリー》	〈サブカテゴリー〉	[コード]
看護学科 1期生の誇り	誰とでも交流がある	派閥がなく仲が良い
		仲の悪い学年ではなかった
		全体で仲良かった
		仲良かった
	卒業後も付き合える仲間	今でも月に1回は集まっている
		学生時代の友人は、学生の時のできごとを振り返ることができる
支えあえる	みんなで頑張ってきた	
	一緒に実習を頑張れた	
クラスに対して自信がもてる	同級生との仲の良さは（私の）自信	
A 大学の 校風	4年間というゆとりの時間	ゆとりがあった
	1期生の誇り	先輩がいない
	校風	園田の校風=のんびり
	教員との関係	見てもらって、大事に育ててもらった
		必死にやってきたけど、先生たちも必死になってくれたことで、達成感につながった

V. 考 察

考察では、人間看護学科の教育の特色である3つの力について、それらが学生時代から現時点においてどのように生まれ、あるいは修正・変容していったのかに焦点を当てて述べる。

1. 「向き合う力」の育成、修正、再生

卒業後6ヵ月の1期生3名の語りの分析から、学生時代の自分自身の課題や臨地実習先で出会った人々、自分を取り巻く状況などに、教員からの指導を受けながら向き合う中で、教育理念の1つである「向き合う力」が4年間の中で育まれていったと実感していることが伺える。しかし、4年間で習得できたと思われるこの「向き合う力」は入職後、患者や状況に向き合いたくないと思ったり、向き合う度合いに強弱をつけたりしながら、さらに自分自身の「向き合う力」を否定するような揺らぎを感じながらも、患者や先輩看護師らの支えを実感する経験を通して、〈逃げない決意〉や〈使命感の芽生え〉により再生されていったことは、「向き合う力」が確かな力として身についた成果と考えられる。

2. 「実践する力」の育成、修正

看護基礎教育では、看護専門職者として必要な知識・技術・態度の基礎的な力の修得が教育目標に掲げられている。立石らは「机上で学んだことと実践との有機的統合によって自信を持つ（結果となった）。」「大学での獲得能力と学習経験の関連から、職業すなわち、看護職としてのレディネスが高い学生ほど、実践能力の獲得が高い。」と述べている（立石・吉本；2006）。このように、知識・技術・態度のすべてを統合して看護ケアを実践することで、その人が一人前の看護

者として自立できると考えられる。しかし、看護の初学者である看護学生や、卒業後すぐの新人では、配属された部署の専門性に応じた新しい知識の習得が求められるため、新たに学習したことと実践を統合することはかなり難易度の高い課題と考えられる。すなわち、卒業直後の新人看護師は、自身が身に付けた知識と技術だけでは、すぐに臨床で活用できない現実に直面し、新たな課題と向き合い、緊張感の中、臨床現場に適応していくことを余儀なくされる。そのような中、今回の研究協力者である卒業生は、《自主的に学ぶ力》、《グループワークの学習効果》、《リフレクションの経験がある》ことを自身の強みにして、新たな「実践する力」の獲得に向け、戸惑い、悩みながらもチャレンジしている姿が伺える。

3. 「連携する力」の育成

吉本は医療関係者へのインタビューより、医療チームとして求められている看護師の能力として、知識面や技術面だけでなく、「仕事をする事への心がまえや十分な体力」、「チームの中で仕事を遂行する能力」、「話し言葉によるコミュニケーション能力」があると分析している（吉本・立石；2008）。看護学実習ではチーム医療について学び、考え、実践を理解する教育機会があるが、学生の立場でチーム医療の一員として参加することは少ない。そのなかで捉えた「連携する力」を、卒業生は他者との支え合いと捉えるなかで、チームの一員であること、《先輩や患者に支えられている実感》を受けとめることで、配属部署のなかでの《居場所探し》をしながら、私はここにいってもいいと思えるような変化をしていた。

「連携する力」の育成は、在学中では不十分で、卒業後に臨床現場での体験を通して、習得していくのではないかと考える。

VI. 結 論

本学科の学生は、1) 大学生としてのキャリア、2) 女性としてのキャリア、3) 看護専門職者としてのキャリアを形成していくと考えられる。そのため、入学時から学生一人ひとりが女性として、看護専門職者としてのキャリアデザインを描けるためにも3つの力の育成に力を注いできた。学生たちは4年間の様々な経験を意味づける取り組みを通して得た成果を、自身の強みと自覚し卒業を迎えるが、就職した現場での新たな経験や状況の中で揺らぎながらも、「向き合う力」を再生していた（図参照）。すなわち、就職後6ヶ月目の卒業生は、4年間の学びを通して培ってきた3つの力のうち「向き合う力」を、問題解決のために活用することができていた。しかし、「実践する力」と「連携する力」は、学生時代に身に付けた力だけでは、不十分であることに気づき、これからの課題と認識していることがうかがえた。

吉本が大学教育の評価を卒業生からのデータで明らかにする必要性を述べていることから（吉本；2007）、今後も、継続的に卒業生からのデータ収集を行い、客観的評価を重ね、より質の高い教育内容・実践を追い求めていきたいと考える。さらに、教育の評価を可視化し、教育内容・

手法等の改善策を検討していくためには、質的データから得られた結果を量的なアンケート手法に変換し、継続的な調査を行っていくことも、今後の研究課題と考える。また、卒業生が勤務する職場からの教育評価も調査対象としていくことで、より客観的な評価が可能になると考える。

Ⅶ. 研究の限界

本研究は、卒業生3名から得られたデータの分析であり、教育成果の結果として偏りの可能性があることは否めない。今後、より多くのデータに基づくさらなる研究の積み重ねが必要である。

謝辞：本研究に協力してくださいました卒業生3名に深く感謝申し上げます。

文献

- 石田秀朗・勝眞久美子（2009）：看護学生キャリアの教科書，どうき出版，大阪
- 白鳥さつき（2002）：看護学生の職業社会化に関する研究，山梨大学医学部看護学科紀要，19巻，25-30.
- 立石和子・吉本圭一（2006）：看護系大学生の職業的な能力（Competence）の自己評価－臨地実習前・後および就職後初期における比較検討－，九州看護福祉大学紀要，8(1)，69-81.
- 若林満・後藤宗理・鹿内啓子（1983）：職業レディネスと職業選択の構造－医療系、看護系、人文系女子短大生における自己概念と職業意識との関連－，名古屋大学教育学部紀要，30巻，63-98.
- 山内栄子・松本葉子・杉本吉美・他（2008）：看護大学の学生における卒業前のキャリアデザイン，日本看護学教育学会誌，18(1).
- 吉本圭一・立石和子（2008）：大卒看護職の初期キャリアとコンピテンシー形成－看護師・関係者インタビューの分析－，広島大学高等教育研究開発センター大学論集，第39集，223-240.
- 吉本圭一（2007）：卒業生を通じた「教育の成果」の点検・評価方法の研究，大学評価・学位研究，第5号

[おおの ようこ 成熟看護学]

[たけもと けいこ 育成看護学]

[しんがき ひろみ 京都府立医科大学大学院保健看護研究科／看護基礎学]

[ちかた けいこ 看護基礎学]